



複文における隠喩の状況設定と諸状況の融合過程

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/577

複文における隠喩の状況設定と諸状況の融合過程

馬場 雄二

An Understanding of Situations of Metaphor and Fusion Processes of the Situations in Complex Sentences

Yuji Baba

Abstract

This paper consists of two parts. One sets up the theoretical framework of knowledge representation of metaphor that is based upon the analysis of the Japanese traditional short and shorter poems; a Waka and a Haiku, in which real and imagery environments are found out to be important. The real environment includes real natural situations (RNS) and real psychological situations (RPS). The imagery environment makes it sure to have general imagery situations (GIS) and specific imagery situations (SIS). An understanding of metaphor depends upon the fusion processes of four kinds of situations; that is, the fusion processes occur strongly when SIS are divergent into RNS and RPS while RNS and RPS are opposite to GIS and SIS distinctly. Another part is the section to prove the theoretical framework discussed above experimentally.

Stepwise data-analysis of 85 students who read the simple metaphor "The snake is progressing straight forward to the caputred" revealed that the framework showed a way to understand the metaphor.

1 隠喩の状況設定

「古今集巻二 春の歌」に「花の色は 霞にこめて みせずとも かをだにぬすめ 春の山風」という和歌がある。この和歌には2つの活喩が使用されている。すなわち「花の色は みせずとも」および「かをだにぬすめ 春の山風」の個所である。「かをだにぬすめ 春の山風」は「春の山風（よ）かをだにぬすめ」となり、「春の山風」という自然現象に「かをだにぬすめ」と命じた表現である。そして、この2つの活喩を手掛りにして、この和歌の本意を解説で

きる。つまり、[花の色は：N₁] → [美しい若い女人は：P₁]、[霞にこめて：N₂] → [深窓の奥で：P₂]、[みせずとも：NP₃] → [姿を見せなくとも：P₃]、[かをだにぬすめ：NP₄] → [かすかな気配でも知りたいものだ：P₄]、[春の山風：N₅] → [折々に物狂おしくなる男は：P₅] ということになる。この解読を散文的に表現すると [美しい女人は 深窓の奥で姿を見せなくとも (この女人を恋して) 折々に物狂おしくなる男は そのかすかな気配でも知りたいものだ] となる。

このように各段の語句がすべて自然現象を意味しているのではなくて、それらが極めて人間的な事象・現象の隠喩を形成していることが理解される。この理解の理解を試みると、“ある美女への恋情”という MAIN THEME が作歌の動機として存在する。その情調を背景に現実心理状況 (Real Psychological Situation: RPS) が設定される。その現実心理状況を転換して現実自然状況 (Real Natural Situation: RNS) が提示される。この二つの状況間の相互対照の照合済みの現実自然状況から、現実の和歌の表現形式に則して語句が選択されて、和歌の創造をみるにいたる。ちなみにいうと、日本人の愛欲の表現の伝統は、直接的な表現は出来得る限り抑圧して、自然や事物に託して真情を吐露しようとする傾向があるという。古今集の和歌の場合、RNS の集合を $N : \{N_1, \dots, N_5\}$ 、RPS の集合を $P : \{P_1, \dots, P_5\}$ 、現実自然心理状況 (RNPS) の集合を $NP : \{NP_3, NP_4\}$ とすると、

$$\text{Original State (OS)} : (N_1 \wedge (N_2 \wedge NP_3)) \rightarrow (NP_4 \wedge N_5)$$

$$\text{Understanding State (US)} : (P_1 \wedge (P_2 \wedge P_3)) \rightarrow (P_4 \wedge P_5)$$

となる。OS の場合、条件節にも結節にも NP が含まれていて、これらが US の環境への道標の役割を果たしている。この和歌の隠喩の環境は、隠喩の理解において、定形的な二重の環境を設定している。しかし、 $N \rightarrow P$ において N をすべて RNS のみとすると P の US が極めて漠然としたものになる。従って、N の中に NP をいれて US への契機としたのである。US が規定されない例を引くと、「新古今集 卷十一 恋歌」に [しるべせよ 跡なき浪に こぐ舟の ゆくへもしらぬ 八重の潮風] がある。この OS は RNS と RNPS で構成され

ているが、RNPS が結語であること以外は不明瞭なために、そこから受けた印象のみで U S 環境を設定しなければならず、あとは感性の相違の問題となり、U S 環境が多様性に富むことになる。

RNS と RPS とを現実環境 (Real Environment) と呼称すれば、古今集の和歌は RNS と RPS の転換で理解できる。つまり現実環境の範囲で処理されるものである。これに対して芭蕉の「象潟や 雨に 西施が ねぶの花」という俳句の理解は、現実環境の範囲内で処理されるものではない。この俳句も自然に託して自己の情調を表現しようとするものである。古今集の和歌が (自然現象) → (人間的な事象)、つまり自然現象が“ある美女への恋情”の隠喩であるのに対し、芭蕉の俳句は [象潟 (自然の風景)] の隠喩が [雨に西施がねむる] である。古今集の和歌が現実環境の設定のみで済むのに対し、芭蕉の俳句はその外にイメージ環境 (Imagery Environment) の設定を要請する。これらの環境設定の理解を記述すると次のようになる。

現実環境 : 象潟一帯の風景は五月雨に霞んで見える。まして水面に映っている景色は漣に打ち消されてしまう。フトミルト近くに合歓の花が咲いている。合歓の花は細雨にしっとり濡れそぼっている。

イメージ環境 : 蘇東坡の「飲湖上 初晴後雨」、楊載の「悼鄰妓」等の漢詩の連想から、象潟を西湖になぞらえれば、西施の面影が浮かんでくる。象潟は西施が半ば目を閉じて眠っている優婉な寝姿を彷彿させるものである。

2 イメージ状況の設定

現実環境 (Real Environment) は現実自然状況 (RNS) と現実心理状況 (RPS) から構成される。またイメージ環境 (Imagery Environment) は普遍的イメージ状況 (General Imagery Situation : GIS) および特殊イメージ状況 (Specific Imagery Situation : SIS) からなる。現実環境は時間的推移とともに変化する。この推移を芭蕉の象潟への紀行から辿ってみると次のとおりになる。

[6月16日]：吹浦から象潟へと出発する(A)。鳥海山が五月雨にモウロウとして煙って見える(B)。雨脚が俄に激しくなったので濡れ鼠になりながら舟小屋に雨宿りをする(C)。小雨になったので塩越の知人宅へと急ぐ(D)。昼頃知人宅に着く(E)。……。夕暮れ時に象潟橋から象潟の雨暮景色を見る(H)。

[6月17日]：朝食後小雨について神宮皇后ゆかりの御陵と伝えられる干満珠寺を訪ねる(I)。この寺の方丈に座って簾を巻き上げて象潟の景色を一望の下に見渡す(J)。……。昼には雨がやんで日が照ったので夕食後象潟に舟を出す(Q)。能因法師が3年間閑居したという能因島に上がりその跡を訪う(R)。その対岸にある西行法師が歌に詠んだという桜の老木を見る(S)。

[6月18日]：往路を辿って酒田に帰る(T)。

(A)～(S)が16日、17日の芭蕉(曾良を含む)の現実環境の経験的推移である。この経験をイメージ的に辿ってみると、これは普遍的イメージ状況(GIS)であるといえる。つまり象潟を訪ねて諸名所を見物したものが感得するイメージ環境である。しかし、風雅に撤し過去の心友・心師との交流に魂を傾注する場合、全般的な現実環境及び普遍的なイメージ状況の幾つかの切点において、特殊なイメージ状況(SIS)が生起する。具体的に指摘すると、切点(H)、切点(I)、および切点(J)の現実環境は、[S I S₁：……雨奇晴好の句を暗じ得て暗中模索して西湖を識る：策源]を起発しその原点には[S I S₂：……晴偏へに好山色空漠として雨もまた奇なり：蘇東坡]のイメージ環境の存在を見る。切点(I)の天下の美観を一望の下に収める行動様式としては[S I S₃：……香炉峰の雪は簾をかかえて見る：白楽天]のイメージ環境を想起する。

切点(C)および切点(R)においては[S I S₄：……象潟の蟹の苦屋を我が宿にして：能因]という象潟の四季の景観と裏合わせになった骨身にしみこむような労苦と孤独のイメージ環境が指摘できる。また切点(S)では[S I S₅：象潟の桜は湖に散りにけり花の上こぐ・・：伝西行]：があり、華やかな象潟の春の変化のイメージ環境が理解できる。

3 現実環境とイメージ環境との融合性

かくして現実環境とイメージ環境の真只中において、象潟の総合的な印象の形成が進行して、総合イメージ環境 (IIE) が生成する。総合イメージ環境とは GIS と SIS との統合である。この場合 [総合イメージ環境：象潟の景色は松島と現実環境において類似している／しかしイメージ環境は、相異なっている／松島を例えれば華やかな美人が晴れやかに微笑んでいるようだ／象潟は憂愁の深い美人に例えられる／その面影は寂しく悲哀に打ち沈んでいるようだ／その風趣は魂の奥底をゆさぶってやまない／] ということになる。

芭蕉の俳句に関して、現実環境、イメージ環境、総合イメージ環境から最大公約数的に語句を精選すると、[象潟] [晴雨] [西施] [寂寞] [美人] 等が挙げられる。[西湖] → [美人] ∧ [寂寞] → [西施] となる。[西施] → [晴] ∨ [雨] → [雨] となる。かくして最終的に [象潟] [西施] [雨] が主要語句として残る。芭蕉の俳句のこの初案は「象潟の 雨や 西施が ねむの花」であった。現実環境において、合歓の樹が象潟の湖畔にあり花をつけていたか否かは疑問である。しかし、イメージ環境において [西施] ∧ [美景] → [花] であり、[西施] ∧ [手弱女] → [ねむる] ならば、この [花] が [眠りの花] → [合歓の花] となる公算は多い。最後に残った語句が [象潟] [西施] [雨] [ねむの花] となれば、芭蕉が初案の俳句を詠む蓋然性は極めて大であるといえる。

さらにいうならば [象潟] [雨] が RNS であり、[ねむの花] が [眠る美人] : SIS とも [合歓の花] : RNS とも受け取れる。[西施] は SIS である。[象潟] ∧ [雨] は [象潟の雨] として結合する公算が大きい。また [ねむの花] ∧ [西施] は [眠る花] → [眠る美人] → [眠る西施] としてイメージが重合する。しかし、この段階までは RNS と SIS との結合が蕩搖状態にあるといえる。初案の芭蕉の俳句が平板であり、いわゆる趣がないのもこのためである。しかし、[[象潟] ∧ [雨]] は [ねむの花] が RNS と認知されつつ、その中に [西施] の SIS が拡大する時、時間、空間を超越した融合の世界が出現する。同時に [象潟] が分離されて、それのみで [象潟] の全情景を表現できると見切った時、融合が

加速されてこの俳句の基本的情調である場の拡大、つまり〔嫋々として寂然とした美感〕の世界の開示を見るに至る。いわば芭蕉の〔わび〕〔さび〕〔しおり〕の情感と周期的に同調して増幅する事態となる。この場合、融合場とは〔芭蕉の芸術的感性〕に求められるといえる。これを〔融合イメージ環境：FIE〕とすれば〔融合イメージ環境：外に形るるの風情を寄せ／中に動くの露胆を謝す／最も幽玄というべし：東鑑〕ということになる。このようにある意味では、夢幻的狀況の下に「象潟や 雨に 西施が ねぶの花」の決定句が誕生したことになる。

4 実験的試行

これまでに隠喩の状況設定について記述してきた。それを大略にまとめると以下のとおりになる。現実自然状況と現実心理状況が設定されて現実環境になる。また、普遍的イメージ状況と特殊イメージ状況が設定されてイメージ環境となる。更に、現実環境とイメージ環境の統合から総合イメージ環境が指定される。SISの個人差に従って総合イメージ環境は相違する。総合イメージ環境の高次の融合場としては〔芸術的感性〕が求められ、それに同調する事態には融合イメージ環境の存在が示唆された。これらの概念規定は和歌、俳句の短詩の分析から招来したものである。当然のことながら、このような状況設定が普通に使用されている隠喩にも通用するか否かが当面の問題となる。この問題解決には平均的な人間を被験者としての簡単な隠喩文の理解の解析を必要とする。

分析の対象とする隠喩文は「蛇は獲物にむかって直進した」である。この文章を85名の学生に提示し、以下のように段階的に設問し回答を求めた。

- 問1. 下線の単語の中からこの文章の成立上重要と思う単語を二つ挙げよ。
- 問2. 選択した二つの単語が意味する属性を出来るだけ多く列挙せよ。
- 問3. 想起した単語のそれぞれの属性で反義的・対立的・相矛盾するものがあれば $(A_1 - A_2)$ 、 $(B_1 - B_2)$ のごとく対として示せ。
- 問4. 反義的・対立的・相矛盾する属性を同一文に含意しながら、何故に見したところそれを認知せずに素直に理解するのかその理由を示せ。

問5. 問4で生じた心的過程を出来るだけ忠実に想起し、その過程を詳細にトレースせよ。

注1. 問1の回答欄は()のみであり、一对の単語しか記入できないように作成した。

計算上の順列数は ${}_3P_2=6$ となる。

注2. 問3の回答欄は(A₁-A₂)、(B₁-B₂)の2対しか設定しなかった。

85名のデータの問1の重要語の順序対の出現数は〈蛇, 直進〉が67、つぎに〈蛇, 獲物〉が17、〈獲物, 直進〉が1であった。実際には計算上の順列数の半数が重要構成配列として選択されたわけだ。〈獲物, 蛇〉、〈直進, 蛇〉、〈直進, 獲物〉の順序対は出現しなかった。これは問1の設定形式にも関係するが、より基本的には主格、目的格、動詞格の格支配が順序対を左右することを示すものである。

〈蛇, 直進〉を順序対とした67の中から隠喩の理解度に従い、段階1~5を設定してそれぞれの段階別に1事例ずつを選び属性語、対立語、文章理解、隠喩理解に関して整理した。段階1~5を簡明に記述すると、以下のとおりになる。

段階1 属性語の想起不備・対立属性語の選択の不適切・文章理解ナシ。

段階2 対立属性語の対構成の焦点不鮮明・文章理解ナシ。

段階3 隠喩理解の不徹底。

段階4 隠喩の平凡な理解。

段階5 隠喩の本質的な理解。

属性語の想起不備・対立属性語の選択の不適切とは、想起した属性語が並列的・イメージ的な属性の羅列であったために、対構成が不完全なものを指す。

また、対立属性語の対構成の焦点不鮮明とは、対を二つに構成して何れの対の分析にも指向性を欠くものを指す。ここでいう“文章理解ナシ”とは問4に回答出来なかったものである。また、隠喩理解の不徹底とは[[蛇行しか出来ない]

[蛇が獲物にむかって直進した]]、つまり [[蛇は蛇行して進む動物である] →

[その蛇が獲物に直進した] → [蛇の状態] [直進とは]] を正確に把握せずに、

「蛇を動物に置き換えて、動物ならば獲物を捕るとき直進する」としたものである。また隠喩の平凡な理解とは、[[蛇は蛇行する] ∨ [全般的に見ると直進している]] という程度の理解である。つまり、隠喩文の二重的性格は把握し理解しているといえる。最後に隠喩の本質的理解とは、隠喩の二重性格の理解の上に、その対立の理由づけとして [[蛇の獲物を捕らえる時の真剣さ] ∧ [今にも獲物に飛び付こうとしている瞬間の状況]] を想定し、対立を一段と高い視点から統合している。

5 データからの段階的考察

データからの段階的考察を行う前に、データの整理法を記述しておく。[蛇][獲物][直進]はいずれも映像的な側面を強く意識した場合、観念表象・映像表象を生起する。従って個々の単語の属性語を想起させると、多様な品詞が出現する。これらの属性語を品詞別に整理しても現実・イメージという側面とは何らの関係もないので、ここでは分類・特徴;行動;印象・イメージ・連想的という三つの部門に大別した。分類・特徴部門は属性が現実に所属する世界、または現実の特徴を表している場合である。例えば[蛇]では生物、動物、爬虫類、毒、長い、細い等である。次に行動の属性とは現実に見られる動きである。例えば[獲物]の場合、逃げる、怯える、食われる、隠れる、走る等である。最後に、印象・イメージ・連想的部門とは、実際には直接の関係はないのだが、第三者的観点から主観的に挙げられた属性である。例えば[直進]の場合、高速、遠い、ロケット、幾何的、盲滅法がある。

分類・特徴部門;行動部門;印象・イメージ・連想部門の個々の単語のすべての属性語の集合をそれぞれA, B, Cとする。

A 分類語・部分的特徴・形状的特徴・状態的特徴

[蛇]の場合、分類語とは生物、動物、爬虫類を指す。分類語集合を $A_1: \{a_{11}, a_{12}, \dots, a_{1h}\}$ とし、ある要素を a_{1x}, a_{1y} とする。部分的特徴とは個体の部分を示す属性であり、毒、鎌首、牙、鱗等である。部分的特徴の集合を、 $A_2: \{a_{21}, a_{22}, \dots, a_{2i}\}$ としてこの中のある要素を、 a_{2x}, a

$_2Y$ とする。また形状的特徴とは、長い、細い、足が無い等の属性であり、この場合を $A_3: \{a_{31}, a_{32}, \dots, a_{3j}\}$ とし、ある元を a_{3x}, a_{3y} とする。最後に状態的特徴として、くねくねしている、曲がっている、のたうつもの等の属性を挙げることが出来る。この集合を $A_4: \{a_{41}, a_{42}, \dots, a_{4k}\}$ とし、このある要素を a_{4x}, a_{4y} とする。

B 本来的行動・一般的行動

本来的行動とは、ある個体・事象に主に見られる活動・動きを指す。[獲物]の場合、この種の属性語は出現しない。[蛇]では、蛇行する、くねくね動く、丸呑みにする等である。この場合を $B_1: \{b_{11}, b_{12}, \dots, b_{1m}\}$ とし、この中のある要素を b_{1x}, b_{1y} とする。一般的行動とは、それ以外の相当数の他の個体・事象にも見られる活動・動きを指す。[獲物]の場合、逃げる、走る、捕まる等である。この一般的行動の集合を $B_2: \{b_{21}, b_{22}, \dots, b_{2n}\}$ とし、この中のある元を b_{2x}, b_{2y} とする。

C 印象的・イメージ的・連想的属性語

印象的とは、実際に見ているある個体・事象またはその映像を知覚して生起するイメージである。[直進]の場合、これは生起しないから[蛇]のものを挙げると、気味が悪い、ぬるぬるする、俊敏である等である。この場合を $C_1: \{c_{11}, c_{12}, \dots, c_{1p}\}$ として、その中にある要素を c_{1x}, c_{1y} とする。イメージ的属性とは、そのシンボルによって喚起された観念を指す。[直進]では、脇目も振らず、速い、安定している等である。イメージ的属性の集合を $C_2: \{c_{21}, c_{22}, \dots, c_{2q}\}$ とし、このある要素を c_{2x}, c_{2y} とする。最後に連想的になるが、これは、ある個体・事象が触発した連想対象を指す。[直進]の場合、ロケット、鉄砲玉、一本道等がある。この場合を $C_3: \{c_{31}, c_{32}, \dots, c_{3r}\}$ とし、このある要素を c_{3x}, c_{3y} とする。

段階1 属性語の想起不備・対立属性語の選択の不適切・文章理解ナシ

| S N o . D S - 14 |

[蛇]の属性語： $A_{11}, A_{21}, A_{32}, C_{11}$

[直進]の属性語： C_{13}, C_{32} (注： A_{11}, A_{21} ……の数字は出現

頻度。以下同じ)

属性語の順序対： $\langle a_1x, c_3x \rangle$ $\langle c_1x, c_3y \rangle$

説明：二つの順序対とも現実の状況を設定し得ないものである。

A_1 は記述性に乏しく、 C_3 は現実性に欠ける。二つの対からは対立さえも構成できず、文章理解には程遠いといえる。

段階2 対立属性語の対構成の焦点不鮮明・文章理解ナシ

| S N o. K K—10 |

[蛇] の属性語： A_23, B_11, C_21

[直進] の属性語： A_11, B_21, C_22, C_31

属性語の順序対： $\langle b_1x, b_2x \rangle$ $\langle C_2x, c_2x \rangle$

説明： $\langle C_2x, c_2x \rangle$ の対は、この限りにおいて対立が成立している。しかし、 c_2x は C_2 としてはかなり唐突な属性語であり、 C_2x の対立語として案出された痕跡が濃厚である。この仮説をもって $\langle b_1x, b_2x \rangle$ の対構成を観察すると、 b_1x の対を意図的に作成した蓋然性は大きいといえる。恐らく、このための対構成の意図が明白にならず、いわば状況の現実性に欠ける印象を与えるものと考察する。

段階3 隠喩理解の不徹底 | S N o. K K—16 |

[蛇] の属性語： A_12, A_31, B_11

[直進] の属性語： A_11, A_41

属性語の順序対： $\langle b_1x, a_4x \rangle$

説明：この順序対は意味的には対立しているが、 $\langle b_1x, a_4x \rangle \rightarrow \langle a_1x, b_2x \rangle$ と推移したために現実世界を拡大してしまった。この思考の推移は状況を曖昧にし、理解の不徹底を招来する結果となった。

段階4 隠喩の平凡な理解 | S N o. K K—9 |

[蛇] の属性語： A_11, A_21, A_41, B_21

[直進] の属性語： A_11, A_41

属性語の順序対： $\langle A_4x, a_4x \rangle$

説明：この順序対は完全に反義的である。K K—9 はある状況におい

て [蛇はくねくねしている] し、ある状況においては [蛇はくねらない] ことを明確に意識している。[蛇] の A_4 を A_4x , [直進] の A_4 を A_4y とすると、 $A_4x \cap A_4y = \phi$ である。もし [蛇はくねくね進む] ; P は T であり、[蛇は真直ぐに進む] ; Q が F であるならば、 $P \wedge Q = F$ となり問題はない。P \wedge Q = T であり、かつ $A_4x \cap A_4y = \phi$ が成立することが問題なのである。KK-9 はこの論理的矛盾を [全体として見ると] ; R で結合しようとした。つまり $R \supseteq P \wedge Q$ であるとした。従って R では P と Q は結合するが融合は生起しない。かくして KK-9 は隠喩を結合的にしか理解できなかったし、その理解も平凡なものに止まったのである。

段階 5 隠喩の本質的な理解 | SN0. RE-21 |

[蛇] の属性語 : A_{11} , A_{21} , A_{31} , B_{11} , B_{21}

[直進] の属性語 : A_{41}

属性語の順序対 : $\langle b_{1x} , A_{4x} \rangle$ $\langle a_{3x} , a_{4x} \rangle$

説明 : $\langle a_{3x} , a_{4x} \rangle$ は対立を構成しているとはいえないが $\langle b_{1x} , A_{4x} \rangle$ は反義的である。RE-21 は [蛇] の状況に力点をおいて意味理解に努めている。[獲物を狙って] は、明らかに [蛇が空腹であり生存の必要からの真剣さ] という含意がある。また [空腹な蛇] \cap [満腹な蛇] = ϕ である。しかし [空腹な蛇] が [今、真剣に獲物に襲いかかろうとしている] ことは状況的に納得できる。従って、[満腹な蛇はくねくねと進む] ; P は T であり、[空腹な蛇が獲物に真直ぐに進む] ; Q も T であるといえる。かくして、この場合、 $P \wedge Q = T$ である。RE-21 は [蛇] を時相を異にした状況で理解しようとした。つまり RE-21 は時相を超越して表層的には対立・矛盾した意味を融合的に理解したといえる。言い換えるならば、RE-21 は隠喩を本質的に理解したのである。

(注 : 属性語の順序対において、A, a, B, b のように大文字と小文字を使用したがる、単語の相違で使い分けただけで同一文字は種類が同じ属性である

ことを表示している。)

以上で段階1～5までの考察を一応終えたことになる。しかし、この考察は〈蛇, 直進〉:〈主格, 動詞格〉の分析であり、〈蛇, 獲物〉:〈主格, 目的格〉の場合でもこのとおりになるか否かは疑問である。従って、次に〈蛇, 獲物〉に関して考察を進める。

段階1 属性語の想起不備・対立属性語の選択の不適切・文章理解ナシ

| S N o . D S - 7 |

[蛇] の属性語: A₁1, A₂4

[獲物] の属性語: A₁3, C₃2

属性語の順序対: 〈a₂x, a₁x〉 〈a₂y, a₁y〉

説明: D S - 7 の二つの順序対は分類的には同一である。従って一つの対として考察する。A₂はA₁と同様に記述性に乏しい。この対は[蛇][獲物]の性質に関して部分的な属性を個別に並記したにすぎない。故にこの対からは対立は構成できず、文章理解には程遠いといえる。しかし、D S - 14に比較するとD S - 7の属性語は全般的に現実世界における objects であるといえる。

段階2 対立属性語の対構成の焦点不鮮明・文章理解ナシ

| S N o . D K - 1 |

[蛇] の属性語: B₁1, B₂3, C₁1

[獲物] の属性語: B₂1, C₂4

属性語の順序対: 〈b₂x, c₂x〉 〈b₂y, c₂y〉

説明: D K - 1 の二つの対もD S - 7のように考察する。B₂は一般的行動を指示し、この行動は指向性に欠けるものである。またC₂はイメージ的・観念的な属性の集合である。従ってD K - 1がいわば[蛇][獲物]を共通の世界に並置して、結合的な属性操作を意図しようとしているのは分かるのだが、このためにかえって意味対立が平板に流れた。対立語は反義的とはならず、対構成の焦点が不明瞭なものになってしまった。このD K - 1の属性語はK K - 10のものに比較し

てより現実的であり、より状況的であるといえる。

段階3 隠喩理解の不徹底 | S N o. R E—10 |

[蛇] の属性語: B₂2, C₂1

[獲物] の属性語: B₂2, C₂1

属性語の順序対: 〈B₂x, b₂x〉 〈B₂y, b₂y〉

説明: R E—10の二つの順序対も D S—7, D K—1 のものと同様な処理をする。R E—10の対は、意味的には対立している。R E—10はこの対立を理解するために [蛇が直進する] のは [獲物] の存在を前提としこの関係から [蛇] と [獲物] は対立していると受け止める。これは、そのとおりに相違ないが、折角の属性語の分析が生かされずに元の世界に戻ったといえる。R E—10のこの理解は K K—16のものに類似しているといえる。かくして、この思考の推移は状況を元に戻して理解の不徹底を招くことになった。

これをまとめると主格、目的格を対とした場合、主格と目的格は相互に規制し合って平板な対立しか構成し得ず、その間に高次の緊張的な洞察的な理解は生起し得ないといえる。しかし、〈蛇, 獲物〉の順序対を選択した被験者の誰もが段階4、5の理解を示さなかった理由付けとして、それ以上に主張できることは、〈蛇, 獲物〉の順序対よりも〈蛇, 直進〉の順序対のほうが、隠喩理解の為の反義的な属性語の対構成を形成しやすかったのではないかということである。つまり、[蛇] はそれ自体 [くねくねする] [くねくね動く] [くねくねと進む] という属性を含蓄している。〈蛇, 直進〉の順序対においては [くねくね進む] と [直進する] が相対立する可能性が大きいといえる。即ち、〈蛇, 直進〉の順序対においては極めて自然に [くねくねと進む蛇] 対 [直進する蛇] の対立する観念・映像形成が生起する蓋然性が大であるといえよう。

6 結 び

認知科学における困難な課題は人間の概念体系を明らかにする試みである。就中、知識分析の問題で最も複雑で多面的な様相を呈するのが隠喩という表現

形式である。隠喩は特に詩歌に重用され、その意味的光彩を陸離とさせるものである。隠喩には多様の定義・解釈が存在し百人百様の受け止め方があるというのも事実である。この研究においては、日本の伝統的な短詩、和歌と俳句を当面の対象として隠喩の状況分析を試みた。その結果、現実自然状況と現実心理状況からなる現実環境と普遍的イメージ状況と特殊イメージ状況を構成要素とするイメージ環境が措定された。更に、これらの状況、環境から次々と総合イメージ環境と融合イメージ環境が導出された。問題はこれらの隠喩の理解が日常使用しているものに適用出来るか否かということである。このために簡単な隠喩文を用意して属性語の列挙、その意味的対立語の設定、対立語の理解程度と段階的に設問して、隠喩の理解を探索しようとした。この結果から、属性語の順序対の対立設定が重要であり、更に対立場面の現実状況とイメージ状況の融合的把握が隠喩理解の基本であるという結論に達した。

後記 この論文は1987年12月4日に機械振興会館の6階66号室で開催された人工知能学会第1回研究会のヒューマンインタフェースと認知モデル研究部会で発表した研究資料(SIG-HICG-8701)を一部改訂したものである。